勝坂遺跡（相模原市）

ここが勝坂遺跡を保存した「史跡勝坂遺跡公園」/右手の建物は管理棟

縄文時代中期の指標となった「勝坂式土器」が発見された地で、多量に出土した打製石斧の特徴から縄文時代に原始的な農耕が行われていたことが推察された

勝坂遺跡D区→有鹿神社（奥宮）→勝坂遺跡A区→管理棟の順に回ってみる

勝坂遺跡D区

ここは「史跡勝坂遺跡公園」となっている勝坂遺跡D区

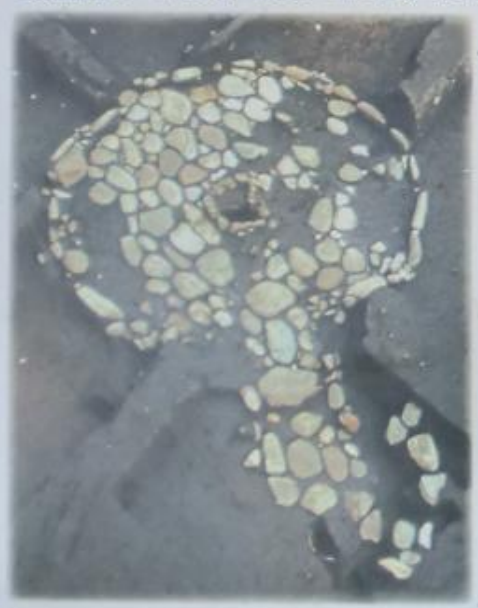
これは敷石住居（30号住居）

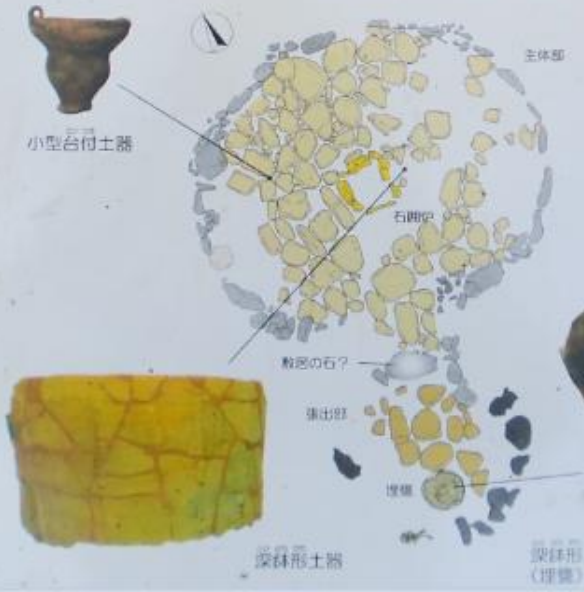
敷石住居（30号住居）

縄文時代中期末葉（約4500年前）
レプリカ展示：型取・造形・塗装

縄文時代中期の終わりごろになると、それまでの竪穴住居から構造が大きく変わり、柄鏡の形に石を敷いた住居（柄鏡形敷石住居）が登場します。この変化は、中期集落が遺跡の数・規模ともに減少していくことと歩調を合わせた現象です。その要因のひとつとして、気候の冷涼化という環境変動が考えられています。

30号住居は土層観察の結果、実際には柄鏡形に掘られた竪穴の中に、敷石されていたことがわかりました。張出部と主体部との接続部には、敷居のような石が置かれています。この出入口部の張出は、出入口の二重構造による、屋外の冷たい空気を入れない工夫とも考えられています。





縄文時代の住居出入口部には土器を埋めた「埋甕」がよく発見されます。埋甕は、縄文人の再生観念による風習とみられ、土器の中に、再生・復活を願うものを入れていたようです。なかには幼児甕棺として骨が出土した事例もあります。

埋没谷と縄文集落群

埋没谷と縄文集落群

勝坂遺跡は、鳩川流域沿いや湧水の流れる谷戸沿いにつくられた縄文集落群です。D区には、北と南に集落がつくられており、その間には、埋没谷が走っています。現況の地形でも谷状に窪んでいることがうかがえます。

谷部などの水が流れる場所は、ドングリを水でさらすアク抜きなどに利用されることがありますが、この埋没谷は調査の結果、集落があったころにはほとんど埋まっていたことがわかりました。また、勝坂遺跡A区には集落を画す埋没谷が確認されています。

縄文生活林−集落周辺の植生と植物利用

縄文生活林－集落周辺の植生と植物利用－

縄文人は生い茂った森を切り開き、集落をつくります。集落周辺では木の実や山菜などの採集、建築材や木製品の木材の伐採、薪燃料の確保など、さまざまな生業活動が行われ、自然環境を開発し、改変していきます。その結果、集落周辺には、日当たりのよい空間と土壌が生まれ、縄文人にとって有用な植物が多く育つ「二次林」が生育していたとみられます。

食料としては栄養価に富み、保存性の高いオニグルミやクリを採集しています。市域ではクルミの実を模した土製垂飾やクルミ形の土器、炭化したオニグルミの殻なども出土しています。

建築材には、耐久性に優れたクリが非常に多く使われています。クリはうっそうとした深い森では多く生育できない木ですが、燃料材としても多用されていることから、集落周辺に多く生育し、人為的に管理されていたと考えられています。

木製品では、石斧柄にナラ類やスダジイ、丸木弓にイヌガヤ、飾り弓にはマユミやミズメを使い、サクラの樹皮が巻かれます。丸木舟にはカヤやスギ、クリ、舟をこぐ櫂にケヤキ、ヤマグワ、ケンポナシ、容器にはケヤキ、トチノキが使われることが多く、材の特性に合わせて木材が選択されていたと考えられています。

木の実の特殊遺物と製粉用の石器

石器と植物製品との組み合わせ道具

史跡 勝坂遺跡公園案内図

国指定史跡 勝坂遺跡は、縄文時代中期（約4500～5000年前）の代表的な集落跡です。大正15年（1926）に発見された顔面把手付土器などの造形美豊かな土器は、この時代を代表するもので、「勝坂式土器」として広く知られています。

この周辺には、起伏に富んだ自然地形、緑豊かな斜面地の樹林、こんこんと湧き出る泉など、縄文人が長く暮らし続けた豊かな自然環境が、今なお残されています。

史跡勝坂遺跡公園で、「大自然の中の縄文時代」を感じてみてください。

さて、前方に復元住居が見える

これは廃絶住居の窪地−竪穴住居から竪穴住居「跡」へ−

竪穴住居「跡」はごみ捨て場として利用されていたらしい

廃絶住居の窪地 ―竪穴住居から竪穴住居「跡」へ―

竪穴住居の耐用年数は数年から10数年程度と考えられています。住居が使われなくなり廃絶された時から、半地下式の竪穴住居は土で埋まり始め、やがて窪地を形成します。このように、縄文集落の景観は数軒程度の住居とともに、廃絶住居の窪地がいくつもあったとみられています。

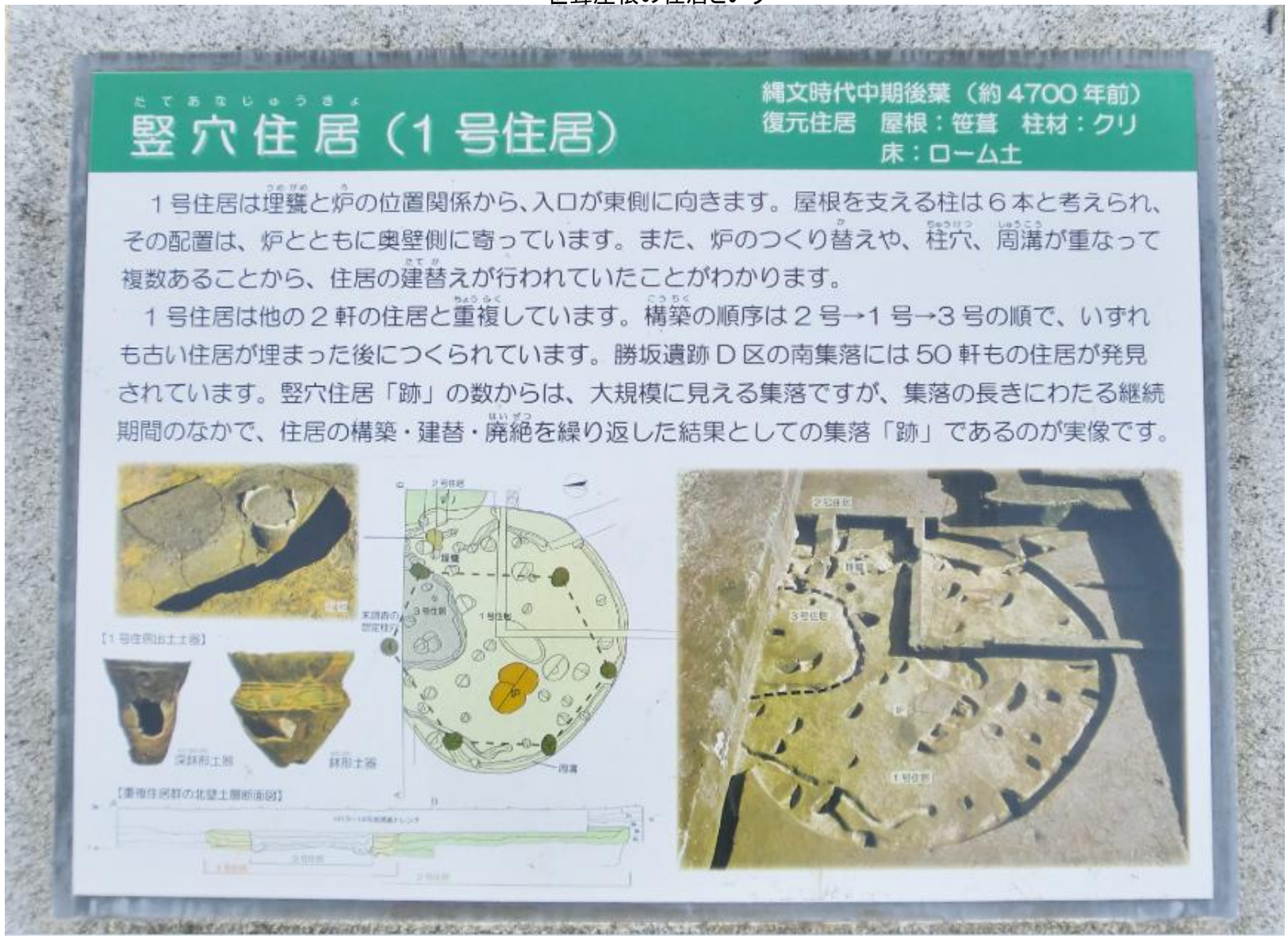
竪穴住居を発掘調査していくと、住居の床面より高い位置の土の中から、土器や石器、石、炭化物などの遺物が大量に出土します。これらは、縄文人が日々の生活のなかで投げ捨てたもので、竪穴住居「跡」となった窪地は、ごみ捨て場として利用されていたようです。

昭和48年調査の竪穴住居
（窪地として整備した10号住居）

竪穴住居廃絶後にできた窪地に投げ捨てられた土器・石器等出土状況（3号住居）

竪穴住居（1号住居）

笹葺屋根の住居という


竪穴住居（1号住居）
縄文時代中期後葉（約4700年前）
復元住居　屋根：笹葺　柱材：クリ
床：ローム土
1号住居は埋甕と炉の位置関係から、入口が東側に向きます。屋根を支える柱は6本と考えられ、その配置は、炉とともに奥壁側に寄っています。また、炉のつくり替えや、柱穴、周溝が重なって複数あることから、住居の建替えが行われていたことがわかります。
1号住居は他の2軒の住居と重複しています。構築の順序は2号→1号→3号の順で、いずれも古い住居が埋まった後につくられています。勝坂遺跡D区の南集落には50軒もの住居が発見されています。竪穴住居「跡」の数からは、大規模に見える集落ですが、集落の長きにわたる継続期間のなかで、住居の構築・建替・廃絶を繰り返した結果としての集落「跡」であるのが実像です。
【1号住居出土土器】
深鉢形土器
鉢形土器
【重複住居群の北壁土層断面図】

東側から見たところ

東側から見たところ

竪穴住居(3号住居)

土葺屋根の住居という

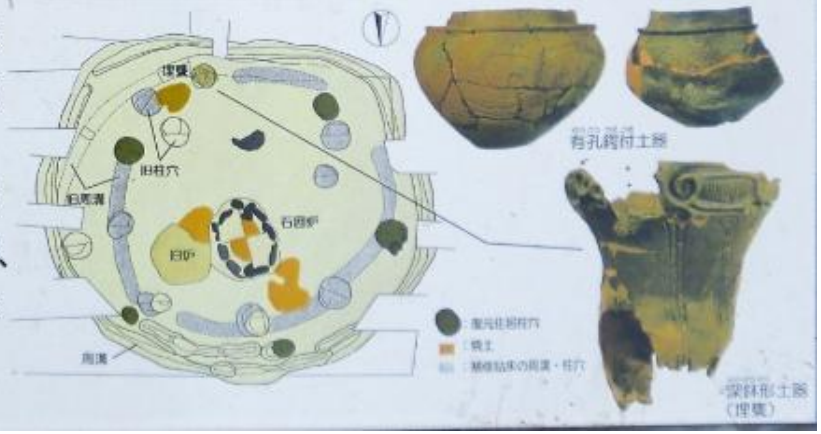
竪穴住居（3号住居）

縄文時代中期後葉（約4700年前）
復元住居　屋根：土葺　柱材：クリ
床：ローム土

竪穴住居はその名のとおり、半地下式の住居です。竪穴の周りには掘り出された土が積まれ、屋根の垂木を打ち込んだり、外からの雨水の流入を防ぐ周堤があったと考えられています。3号住居の場合、竪穴の掘削で出された土の量は、10ｔダンプで約4台分にもなります。

また、焼失した竪穴住居の調査事例や、中～北緯度の狩猟採集民による民族誌事例では、土葺きの竪穴住居が認められ、周堤以外に土を屋根に葺いて利用したことも考えられます。

土葺住居は密閉された屋内空間をつくる特徴から、非常に保温性に優れた住居形態といわれています。3号住居には、石囲いの炉があり、家を暖めていたことでしょう。一方で、雨漏りや湿気のため、湿潤な時期に住むのには適さず、寒い時期だけの「冬の家」とも考えられています。



南東側から見たところ

南側から見たところ/右手奥は1号住居

少し退いて見たところ/ここにも説明板が立っている

発見のこみち KASSAKA 勝坂（かっさか）

案内マップ

史跡勝坂遺跡公園

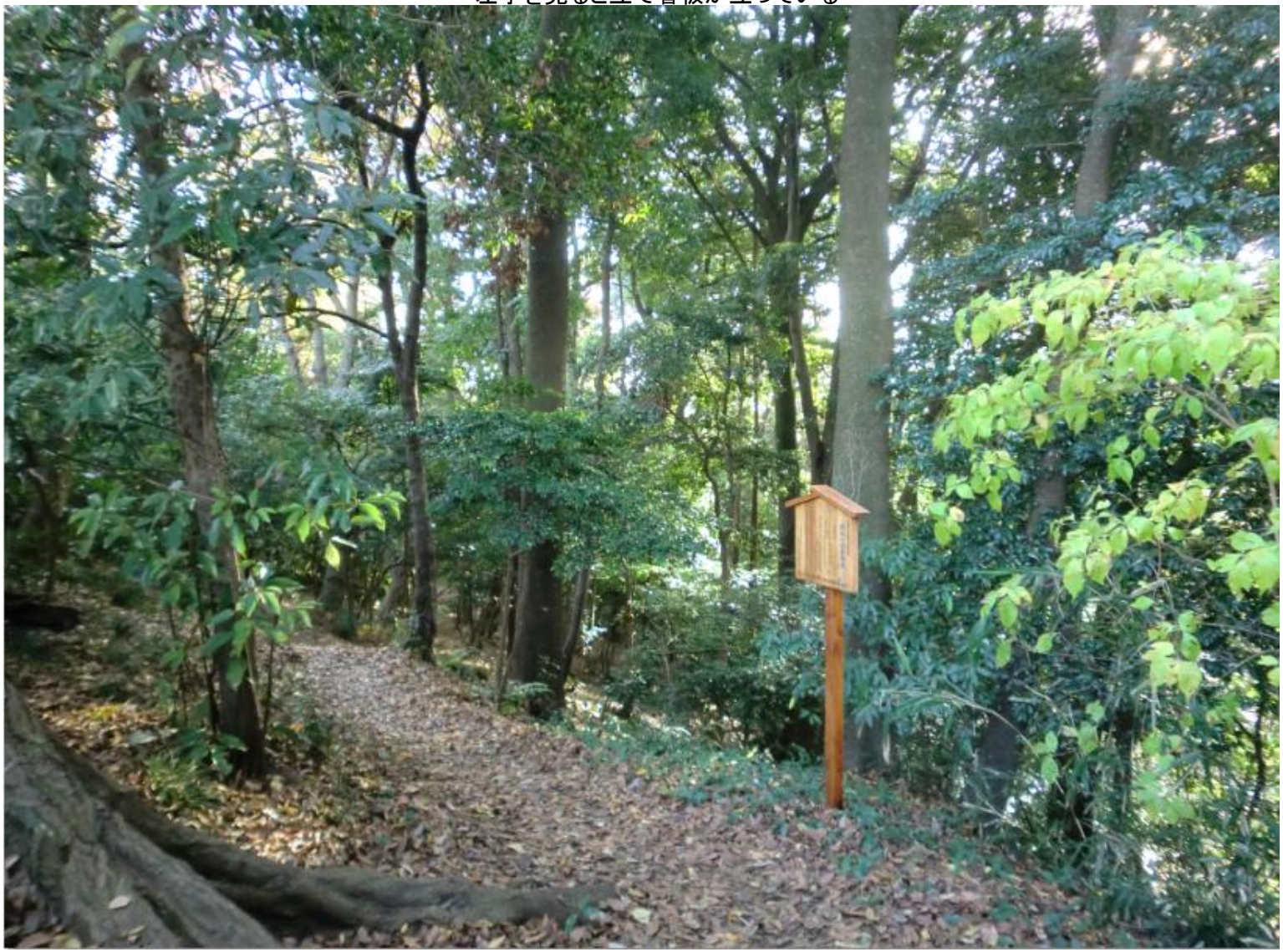
次のことを守って、みんなに迷惑をかけないように見学しましょう。

- 展示物をこわしたり、よごしたりしないようにしましょう。
- ゴミは持ち帰りましょう。
- 火遊びや危険な遊びは、やめましょう。
- 野球やゴルフなど硬いボールで遊ぶのはやめましょう。
- 花や木を大切にしましょう。
- オートバイや自転車は、乗り入れないようにしましょう。
- 犬の放し飼いは、やめましょう。
- 犬のフンは、飼い主が責任を持って持ち帰りましょう。

相模原市役所　公園課
文化財保護課
電話　042－754－1111

貴重な天然記念物・自然環境の保全をこころがけて散策しましょう。

左手を見ると立て看板が立っている



相模原市登録天然記念物
勝坂の照葉樹林
この樹林は、シラカシを中心
とする照葉樹（常緑広葉樹）が
二次的に回復したものです。
低木層にはアオキ・ヒサカキ・
シラカシ・タブノキ等が見られ、
草本層にはナガバジャノヒゲ・
ヤブラン等が目立ちます。
登録年月日 平成13年4月1日
相模原市教育委員会
みんなで守ろう文化財
連絡先 文化財保護室 042(769)8371

有鹿神社（奥宮）

さて、前方の鳥居のところが相模国で最古の神社である有鹿神社（奥宮）

ここが有鹿神社（奥宮）/ここで古墳時代から祭祀が行われていたという/後ろは勝坂遺跡D区のある段丘

その左手に湧水が流れ出ている

ここが「有鹿の泉」

こんな感じで流れ出ている

勝坂遺跡A区

ここの右手前の小道を進んでいく/前方は石楯尾神社の鳥居

その右手がこんな風景でこのエリアが勝坂遺跡A区/北側から見たところ

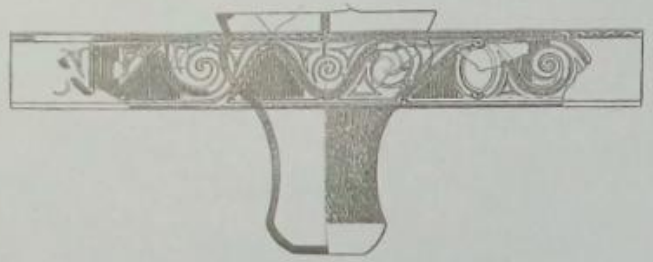
東側から見たところ

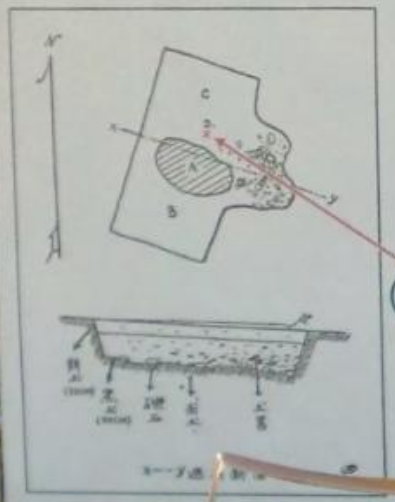
南側から見たところ

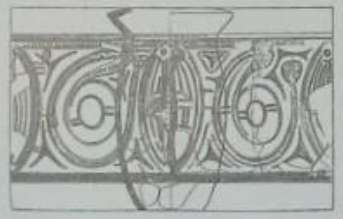
そこから振り返って南方向を見ると前方の道路右下に説明板が見える

正面下がその説明板/ここが勝坂式土器発見の地

勝坂式土器発見の地







「勝坂遺跡」は、縄文時代中期の典型的な集落跡であり、わが国における考古学上の代表的な遺跡でもあります。また、本遺跡から出土した「勝坂式土器」は、縄文時代中期を代表する土器として今日では全国的にその名前が知られています。

この土器は、大正15（1926）年10月3日、考古学者大山柏氏が中村忠亮氏所有の畑地を発掘調査した際に、初めて発見したものです。大山氏が土器を発掘した場所は現在正確にはわかっていませんが、地図に示した場所の近辺と推定されます。大山氏らの発掘調査はわずか一日だけでしたが、翌昭和2（1927）年に刊行された調査報告書は、今日的にみましても精緻極まる大変豊かな内容をもつものでした。

その後、昭和3（1928）年には考古学者山内清男氏により時期区分の基準となる土器として、「勝坂式」という土器型式名称が与えられ、勝坂遺跡は勝坂式土器の標式遺跡となりました。

「勝坂式土器」は、今から約5,000年前の縄文時代中期につくられたものですが、イラストの顔面把手のように彫刻的な把手や立体的な文様に大きな特徴がみられ、器形の雄大さや装飾の豪華さなど、その造形は他のいずれの土器にも例をみないものです。

管理棟

さて、管理棟に展示されている資料を見てみよう

川・台
勝坂遺跡のある場所
―地形・地質編―
勝坂遺跡は相模原市東部に広がる相模原台地の相模川流域沿いに位置し、その支流の鳩川左岸に立地します。相模原台地は数十万年間のグローバルな環境変動に連動した相模川の下刻・流路変動と、富士火山等の火山灰の降下による厚い関東ローム層の堆積により
形成しています。各段丘面のローム層下には古相模川が残した河原石が
堆積し（礫層）、台地斜面下に露出した礫
層がみられる鳩川下流域などでは、地下
水から流れ出した湧水が発達しています。
勝坂遺跡斜面下の湧水

古い
勝坂式土器
新しい

古い
式土器
新しい

有鹿神社奥宮の
お水もらい神事

参考ホームページ

http://www.gregorius.jp/photogallery/page_b55.html

http://blog.goo.ne.jp/ruribo0209/e/c4bf50b08236a1f79376a10ddf6239f6

http://www.amy.hi-ho.ne.jp/suruga/katusakaiseki.htm

http://linka100.cocolog-nifty.com/blog/2012/02/post-0a72.html

東大沼
栄町
南区
原当麻
女子美大
相模原愛川IC
下溝
桜台
相模台
小田急相
磯部
猿ケ島
相武台
相武台前
栗原
相武台下
中津川
厚木
関口
入谷
座間市役所
座間市
1 km
(C)Yahoo Japan,(C)ZENRIN